



白秋・生誕120年

57年の生涯

トンカジヨンの誕生

北原白秋は明治18年（1885年）1月25日、沖端町で酒造りを営む北原長太郎・シケの長男として生まれました。本名は隆吉（りゅうきち）といいます。北原家は代々、柳川藩御用達の海産物問屋で九州でも屈指の旧家で、屋号を「油屋（あぶらや）」または「古問屋（ふるといや）」と呼んでいました。

白秋の父の代から酒造業が本業となり、「潮（うしほ）」という名前の酒をつかっていました。栄えたころは毎年三千石もの酒を仕込んだと記録に残っています。酒の仕込み時になると蔵男たちが出稼ぎにやって来るし、番頭や女中を加え、多いときは7、80人の使用人で家の中はこったがえししていました。

当時の沖端には長崎、五島、平戸、天草、鹿児島などからの船の出入りが絶えず、海産物と一緒に、南蛮風のものや異国なまり、風俗なども持ち込まれていました。

白秋は将来、老舗「油屋」の跡取り息子ということで、「油屋のトンカジヨン（大きな坊ちゃん）」という愛称で呼ばれ、家族や周囲の人たちから大切に育てられました。生まれつき虚弱な子でしたが、母はしつかに厳しく白秋の成長に心をくだきます。幼いころから白秋の記憶力は抜群でした。2歳のころ、母と乳母で小

浜温泉へ旅行したことがありました。そのときの白秋を抱いていた人の蝙蝠傘（こうもりかさ）が白であったことを後々まで、はつきり覚えていました。

明治24年4月、矢留尋常小学校に入學。白秋少年は休みになると南関（熊本県）の外目にある母の実家に行き、自然の中で遊びました。母の実家、石井家にはたくさんの本があり、その蔵書の中で本を読み、また英学校出身の叔父は、日本の昔話やアラビアンナイトの物語、西洋奇談などのいろんな話を聞かせてくれました。おとなしい性格の白秋は、成績が抜群によく首席で小学校を卒業しました。

柳河高等小学校を2年を終了した白秋は、明治30年4月、中学伝習館に入學します。当時の高等小学校では4年の課程を経て、中学に進むのが建前で、2年の飛躍は、後にも先にも例のないことでした。

白秋の伝習館での席次は常に1、2番でしたが、3年進級のときに幾何（数学）1科目のために落第してしまいます。それからは文学への熱は高まるばかりで、友人と回覧雑誌「蓬文（ほうぶん）」を作り、雅号を「白秋」とし、詩歌散文の創作に熱中しました。また、同人雑誌「文庫」に多数の短歌を投稿し、選者に認められ、中央詩歌壇にたつ契機となりました。明治34年3月、沖端村北町民家から火災が発生し、激しい北風に火勢



◀白秋が生まれ、文学の芽をのばした、母の里、南関外目の石井家



▲白秋の父・長太郎と母・シケ

▼白秋生家に展示してある北原家の造り酒屋を再現したミニチュア。古賀國昭さん（横山町）と谷口真澄さん（矢留本町）が制作



▲伝習館4年のとき、国語教師・榎の転任送別記念写真。2列目右端が白秋



Hakushu Kitahara



水郷 柳河こそは、
我が生まれの里である。
この水の柳河こそは、
我が詩歌の母體である。
この水の構圖この地相にして、
はじめて我が體は生じ、
我が風は成った。

「水の構圖」より

北原白秋
生誕120年

うぶすな
山門は我が産土

詩人・北原白秋は柳川で生まれた。

来年1月に生誕120年目を迎える。

明治から大正、昭和を生き抜き、

詩歌、童謡、民謡など幅広い分野で活躍し、国民詩人と呼ばれた。

最期まで故郷を思い、たくさんの人から愛され慕われた。

白秋とはどんな人物だったのか…



白秋・生誕120年



▲昭和3年7月、上空を飛行する白秋に矢留小学校子どもたちはヤドミ「ヤ」の字の人文字で迎えた（絵・北島勉さん）

20年ぶりの帰郷

昭和3年に大阪の朝日新聞社の依頼で、日本初の芸術飛行に参加して20年ぶりに郷土柳川の空を飛びま

す。このとき白秋は、詩人として歌人としてまた童謡に、民謡に数多くの作品を作り、すでに偉大な国民詩人としての貫禄を示しつつあった時代です。母校の矢留小学校では、機上からのあいさつにこたえて、運動場に生徒を「ヤ」の字の人文字をかいで歓迎のあいさつをしました。

飛行に先立ち、陸路柳川に入った白秋は、沿道で日の丸の手旗を持った大勢の人たちの大歓迎を受けます。感激した白秋は、矢留小学校の講堂で、子どもたちを前に声をつまらせ、泣くばかりでした。

昭和10年に白秋は新幽玄・新象徴を理念として「多磨短歌会」を結成。歌誌「多磨」を創刊しました。浪漫精神の復興をめざし、たちまち歌壇を二分する新勢力となります。しかし昭和12年、過労のため発病して視力が衰え、薄命の世界に入りました。

しかし文筆の意欲は衰えることなく、昭和14年には紀元二千六百年記念・長篇交声曲詩「海道東征」と長唄「元寇」を完成し、その2年後に福岡日々新聞社から文化賞が授与されます。贈呈式に招かれ、帰郷が決まった喜びの中で作られたのが、詩作品の中で最後になった「帰去来」です。白秋は故郷を最期まで愛した人でした。

日本芸術院の会員にもなりますが、昭和17年11月2日、惜しまれながら57歳で永眠しました。



▲矢留小学校西隣の白秋詩碑苑にある「帰去来の詩碑」



▲昭和16年3月矢留小学校の講堂へ向かう白秋



▲第二詩集「思ひ出」



▲処女詩集「邪宗門」



▶白秋22歳の明治40年8月「五足の靴」の一行は、三橋町高畑の懐月楼（かいげつろう・現在の松月文人館）に立ち寄りしました

北原白秋の生涯

昭和	大正	明治
昭和3年（1918） 11月2日、東京杉並の自宅で腎臓病のため逝去。 昭和5年（1920） 5月、八幡製鉄所の所歌作成のために1か月余帰郷。 昭和8年（1923） 「さより」作詩。 昭和10年（1925） 6月、多磨短歌大会を創立主宰し短歌誌「多磨」を発刊。 昭和16年（1931） 3月、福岡日日新聞社文化賞を贈られ受賞のため帰郷。5月、日本芸術院会員となる。 昭和17年（1942） 57歳	大正7年（1922） 鈴木三重吉の創刊した「赤い鳥」によつて、児童自由詩の運動をおこす。 大正8年（1923） 「雨」作詩。 大正10年（1925） 「あわて床屋」「さすらいの唄」作詩。 大正13年（1928） 「ちんちん千鳥」作詩。 大正14年（1929） 「待ちぼうけ」「すかんぼの咲く頃」「ベチカ」作詩。 大正15年（1930） 「この道」作詩。 昭和2年（1917） 「ちゃつきり節」作詩。 昭和3年（1918） 朝日新聞社の依頼により大刀洗から大阪へ芸術飛行を行う。 その前に郷里柳川の空を飛び20年ぶりに帰郷する。「松島音頭」作詩。	明治18年（1885） 誕生。 明治24年（1911） 4月、矢留尋常小学校に入学し、近くの内山田雲畦に書を習う。 明治28年（1915） 矢留尋常小学校を卒業して柳河高等小学校に入学。このころから日本古典や翻訳小説を読みはじめる。 明治30年（1917） 4月、柳河高等小学校を2年で終了し、中学伝習館に入学。 明治34年（1921） 3月、沖端の大火で酒蔵が類焼する。冬、学友と文学会を起こし、回覧雑誌「蓬文」を出す。詩歌の制作に熱中し、このころ白秋の号を使う。 明治37年（1924） 伝習館を中退し、4月上京して早稲田大学英文科予科に入る。 明治38年（1925） 1月、早稲田学報の懸賞に応募し長篇詩「全都覚醒賦」が1等に入選。 明治39年（1926） 与謝野寛、新詩社同人となり、「明星」にさかんに詩を発表して、石川啄木、木下全太郎、吉井勇などと交わる。 明治40年（1927） 夏、与謝野寛、木下全太郎、吉井勇、平野万里とともに「五足の靴」の旅をする。冬、新詩社を脱退する。 明治42年（1929） 1月、若き詩人、画家とともに「パンの会」を起こす。 3月、処女詩集「邪宗門」出版。



横尾 文子^{あやこ}さん

佐賀市・53歳
佐賀女子短期大学教授



北原 悌二郎^{ていじろう}さん

本城町・80歳
画家

時代が変わろうとも永遠に残るもの

私が中学伝習館に通っていた昭和16年、白秋先生が私たち生徒の前で講演されました。すでに目が不自由で黒眼鏡をかけてありました。演壇には、長男の隆太郎さん、長女の簗子^{なご}さんに支えられて上がられました。講話は25分くらいでした。「詩を作るためには数学の力が必要」「音数律^{おんすうりつ}も大事」と言われたことを感心して聴いていました。

白秋先生が生まれ育った沖端は平家の落人・六騎^{ろくき}が住み着いたまち。白秋先生が生まれた明治時代は、さかんに海産物などの物流が行われ、オランダやポルトガルの異国文化も流れてきていました。その中心にあったのが白秋先生が生まれた古問屋^{ふるどいや}でした。白秋の父はビードロや風な

どめずらしいものを集め、裏の畑にはダリアを植えたり、七面鳥を飼ったりする、ワサモン好きでした。が、んこだったけど時代を先取る前向きな人でもあり、やがて船の時代は終わると、酒造りを始めました。

白秋にもその血が流れています。後に誰もやらなかったマザーグースの翻訳や、隠れキリシタンの文化に手をつけたり、童謡運動や農民文学運動などの草分けを果たしていくのも父親譲りの血でしょう。

そして忘れてならないのが、第二の故郷である母の実家、南関です。そこで読書にふけり、読むのに疲れると南関の山を歩き、植物や虫の観察をして遊んだことが、後の白秋文学の大きな肥やしになりました。

白秋先生は、詩や短歌、童謡だけでなく民謡や校歌、社歌、書、絵など幅広く作品を残すなど、いわゆるマルチ人間です。人を引きつける力もありました。一貫して、自分を育んでくれた柳川の水、空気、風とか人情などを忘れませんでした。

社会傾向として、映像文化が活字文化に取って代わろうとしていると思います。読むより見て感じる方が手取り早いという大きな変化のうねりが起こっています。しかし自分の感じた気持ち、自分の言葉で表現していく表現の重み、深み、豊かさ、奥行きを忘れてしまつては、文化は立ち消えになると思います。

表現の重みや深み、豊かさには先鞭^{せんべん}をつけた白秋です。私は言葉の紡ぎ方、織り方を白秋先生から教えてもらったことを大事にしたいと思っています。「思ひ出」や「雀の生活」など代表的な作品は活字のまま読んで、白秋の心をかみしめてほしいです。人間の幸せは心の豊かさだと思います。物、金では満たされない、本当に心の底から満たされるものは白秋文学だと思っています。柳川の人に、もう一度見直してほしいです。

白秋は時代が変わろうとも永遠に残るものだと思います。

いくつもの白秋研究をつないでいくこと

私の大学時代の恩師が、白秋先生の弟子の木俣修^{きまたおさむ}先生でした。卒業論文で白秋を研究したのが白秋研究のきっかけです。それ以来、ちょくちょく柳川を訪れては元気をもらっています。

白秋ほど、詩や短歌、童謡、民謡、散文など全領域にわたって作品を残した人はいません。白秋は感じたことを、詩や短歌、童謡など、何で表現するか分かっていて、とてもテクニクのある人でもありました。

また白秋は、本の装丁も自分でする美術家でもありました。本の天井には金を使い、表紙などには金や銀の箔^{はく}を押し、挿絵も自分で描いていました。ペーパーナイフでページジ

出しました。本を開くとパーッと香りがたつような、本を開く楽しみを知っている人でもありました。まさに総合芸術家でした。

童謡を作るときは純粹で、わかりやすく、やさしく、自分の詩の心を深く突き詰めています。「雨ふり」の中の「ピッチピッチチャブチャプランランラン」のフレーズ。雨が降ると気持ちがなんとなくしんみりしますが、雨が降って楽しい気分を、こういう言葉で表現できることは、誰も発見できなかったことです。「雨ふり」のような楽しい雨の詩がある一方、「城ヶ島の雨」のような雨もあります。白秋は、いろいろな表情の雨を表現することができました。また白秋は、いろいろな雨音を

聞き分けたといえます。おそらく、貧乏な生活を送った時代、白秋は雨と一体になるという新境地を開いていったのではないのでしょうか。

白秋の研究は、詩や短歌などそれぞれの分野で行われていますが、それらをつないで白秋の全体像をとらえる研究はまだ進んでいません。あまりにも多彩で、作品の一つ一つが完成されているため、普通の研究者にはとてもついていきません。

私自身、白秋を研究していると途中で白秋が見えなくなり、やめようと思うことがあります。気分転換に、考古学や焼き物の古美術の研究をしたりしますが、そういう世界でも研究していくうちに、白秋につきあたってしまふのです。白秋の土地を見る感覚や誠実さ、また美意識のすごさを、あらためて気づかされるのです。するとまた違った白秋像が見えてくるのです。

白秋の研究はこれから進んでいくと思います。都市構想についてもちやんとした考えを持つなど、本当に多彩な人でしたから、いろんな分野の人が研究し、声をあげていいと思います。いろんな意見に耳を傾け、そして手をつないでいく。そういう役割を白秋の故郷、柳川が果たしてくれればと思っています。



▲長谷健顕彰会が中心となって10月16日に開催した「子どもの命と心の成長を描く 柳川文学まつり」。芥川賞作家・長谷健（1904～1957）は、白秋を尊敬し、昭和23年の「帰去来の詩碑」の建設に尽力しました。



▲白秋を敬愛した、直木賞作家・檀一雄（1912～1976）の文学顕彰祭が9月23日、柳川婦人会館で開かれました。長男の太郎さんや長女ふみさんも一緒に、檀一雄作詩の「白秋の生まれた町で」を合唱しました。



◀童謡「からたちの花」のモデルとなった、からたちの木（3代目・左写真）。すぐ近くには、「あわて床屋」のモデルになった「駒床」（右写真・現在は駐車場）があります。（地図は11ページ）



▲柳川地方の歴史と文化を掘り起こす「柳川ふるさと塾」（原達郎塾長）でも、白秋が取り上げられます。10月9日の例会では「白秋の初恋と紺屋のおろく」がテーマになりました。



白秋のまちに住む私たちができること 「赤い鳥」の歌や朗読が白秋生家に響く

北原白秋生家では毎月1回、白秋の歌や詩の朗読などを行うミニコンサートが開かれています。開いているのは、白秋のまち柳川の『赤い鳥』の皆さんです。きっかけは、今年3月のさげもんめぐりの期間中に、白秋生家で開いたミニコンサートが好評だったことから。そこで、4月から定期的にコンサートを開くことになりました。

コンサートでは、白秋についてのエピソードを交えながら、童謡を歌ったり、メンバーが交代で詩の朗読を行います。来場者からのリクエストにも応えます。

来場者からは「来てよかった」「今度また友達を連れてくるから」などの声が聞かれ反応は上々です。時には涙を浮かべながら聴き入る人



「赤い鳥」メンバー・声楽家
木村 襟子さん（橋原町）

白秋が生まれ育った生家で、白秋の作品をあじわってもらいたいというのが、私たちの願いです。約1時間のコンサートは毎回違った内容となっています。お客さんと私たちが一つになって感動し合うコンサートです。

歌い手として、白秋が生まれた柳川に住んでよかったと思います。

もいるそうです。コンサートが終ると来場者に「どこから来られましたか」と声をかけるなど、「コミュニケーション」も大切にしています。「赤い鳥」の会員は10人。白秋の作品にふれるたびに、全員自らがその奥の深さに感動し、もっと勉強が必要だと感じ、ますます白秋の世界にのめり込んでいくそうです。

コンサートで司会を担当する古賀千鶴子さん（本城町）は、「白秋の生きざますべてが白秋の詩になっています。そして白秋が柳川に深い思いを持っていたことが分かってきました」と話します。

朗読を担当している本木千明さん（間）は、「白秋の言葉は、読んでいて無理がありません。難しい言葉を使っていますが、声に出して読むと

体にスツと入ってきます。詩に流れがあり、メロディーがあるようです」と話します。また、音訳ボランティアもしている長理恵子さん（高田町）は、朗読の経験を積んでいくうちに、以前は読めなかった白秋の言葉が随分読めるようになり、白秋の世界が広がりました」と話します。

事務局の古賀和範さん（東蒲池）は「コンサートを開くことで、自分たちが白秋のことを知らないことにあらためて気付かされます。白秋の詩を読み、歌い、感動し、白秋の世界を広げていく。それを、生家を訪れた人ばかりでなく、地元の人にも発信していけたらと思っています。地元の人々が白秋への認識を深めれば、もっと柳川が魅力あるまちになっていくと思います」と話します。

「赤い鳥」は、10月21日には「アクロス福岡」でのフロアコンサートに出演しました。生家でのコンサートばかりでなく、学校や保育園・幼稚園の訪問も計画しています。生家でのコンサートも、要望があれば随時、受け付けています。

「赤い鳥」への問い合わせは、事務局の古賀さん（☎090・4986・9592）までどうぞ。

白秋の母校・矢留小学校の子どもたちが歌い継ぐ 私たちの声よ、白秋先生へ届け！

白秋の母校、矢留小学校（315人）では毎年「校内白秋祭」が開かれています。今年で33回目になる校内白秋祭が、10月19日開かれました。ステージに白秋の写真が飾られた体育館には、全校生徒のほか保護者

など約100人も訪れました。司会を務める子どもが「心を込めて、白秋先生に聞こえるように大きな声で歌いましょう」と始めのことはを言います。子どもたちは白秋のことを「白秋先生」と呼ぶのが伝統です。子どもたちは学年ごとに次々とステージに上がり、体を左右に動かしたり、手を振ったりしながら、白秋の童謡12曲を元気いっぱい披露しました。

校内白秋祭ではこのほか、白秋会の大城会長が白秋の少年時代のことを話し、白秋祭献詩で入賞した子どもたちの作品朗読、図書委員会は、白秋の一生を大型紙芝居にした「白秋物語」を上演しました。集会委員会は白秋についてのクイズを行い会場を沸かせ、最後は保護者のコーラスも披露されました。

矢留小学校の子どもたちは、様々な機会で白秋にふれる機会を持っています。毎月「今月の歌」を決め、白秋の童謡を朝や帰りの時

間・週1回の、白秋なよしタイムなどで歌います。歌の指導は、担任の先生や音楽主任の堤朱美先生、大川児童合唱団を指導する石橋良知先生が行います。できるだけ歌詞の意味を理解し、情景を思い浮かべながら歌うようにしています。

また3年生は、総合的な学習の時間に白秋生家を訪れたり、地元の人に話を聞いたりして白秋について勉強します。5年生になると、1月の白秋生誕祭でマーチングバンドを披露します。6年生では、白秋祭の式典で「帰去来」を合唱します。

矢留小学校校長の加藤君代さんは「6年生になると、白秋先生の歌は20曲以上覚えることになりますし、歌うことも子どもたちは大好きです。子どもたちが、大人になって柳川を離れても、白秋先生の歌を耳にしたら故郷のことを思い浮かべることでしよう。帰去来の詩の意味は年を重ねないと理解できないかもしれませんが、歌を通して故郷を思い浮かべることができることはすばらしいことです。今後も白秋先生のすばらしさを、地域の人と協力しながら子どもたちに伝えていきたいです」と話していました。



▲元気いっぱい、白秋の童謡を歌う子どもたち



▲白秋の一生を紹介した紙芝居「白秋物語」



▲白秋祭献詩での入賞作品を朗読



▲白秋の作品を来館者に紹介する「赤い鳥」のみなさん



▲来館者と対話するように、コンサートは静かに進められます（コンサートは、毎月第2日曜日、午後1時30分から行われています）



白秋・生誕120年

伝える



▲白い壁となまこ壁が美しい生家の入口



▲生家の中はなつかしい土間のにおいがする

白秋の息づかいが聞こえてくる生家

白秋の生家は、北原家が破産し一家が柳川を離れたあと、精米所や缶詰工場、あるいは佃煮工場と幾度も所有者が代わりました。白秋は昭和3年、20年ぶりに柳川に帰ってきたが、大釜でアゲマキが煮られる缶詰工場となった生家を見て、「胸がつまり、流れる涙を立ちこめる湯気にまぎらわした」と書いています。昭和42年ごろ、ついに生家を取り壊されるという噂が立つと、地元の人たちが立ち上がり、生家保存のための

募金運動が展開されます。集まった浄財で、昭和44年8月、生家復元の工事が着工し、白秋27年忌の前日にあたる同年11月1日、白秋生家は復元されました。また、生家は昭和43年10月、県史跡として指定を受けています。生家の復元はできる限り、白秋の少年時代の姿に近づけるため、姉・江崎加代、弟・義雄、そのほかの肉親関係者が図面を引きました。狭い入口をくぐると、ほの暗い土間が広

がり、茶の間、勘定部屋、食堂、仏間などには今にも白秋が現れてきそうです。現在は、財団法人北原白秋生家保存会が設立され、生家の永久保存と共に、白秋の文学資料や遺品などの収集を行い、一般公開しています。また、北原家の広大な旧跡地の一角に、白秋生誕百年記念事業として昭和60年10月、白秋記念館（柳川市歴史民俗資料館）が開館しました。1階展示室は柳川の歴史と漁業のまち沖端に視点を置き、民俗などについて展示。2階は、北原白秋の詩業と人間像をテーマに、白秋世界の全貌をとらえる視点から構成されています。また白秋の生涯などをビデオシアターで見ることもできます。白秋生家の入場者数は、開館後は年々増加し、平成4年には年間23万人もの入場者がありました。しかし、その後減少傾向が続き、昨年はピーク時の半分以下の10万人まで落ち込んでいます（下グラフ）。



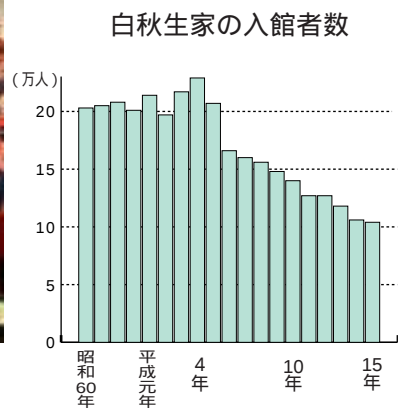
沖端周辺図

北原白秋生家・歴史民俗資料館
沖端町55の1 ☎73・8940

- 入館料 個人・大人400円、子ども150円、学生350円（30人以上の団体料金もあります） 11月2日は無料
- 開館時間 午前9時～午後5時



▲柳川の歴史や文化、民俗も紹介しています



白秋先生をもっと身近に知ってもらおう工夫を

白秋会には、白秋先生を顕彰しようと全国に約650人の会員がいます。白秋先生が亡くなって6年後の昭和23年、白秋詩碑が完成しました。その後、地元で白秋を顕彰しようという運動が始まり、白秋会がつけられました。初代の会長は祖父の太城有樹（またき）でした。有樹は白秋先生の弟、鉄雄さんと同級生で、白秋先生とはよく一緒に遊んだ幼なじみでもありました。昭和29年に最初の白秋生誕祭を開いています。有樹が亡くなり、父の有元（ゆうげん）が2代目会長に就任しました。そして昨年、父が亡くなり、今年から私が会長を引き受けることになりました。白秋会では、毎年1月25日の生誕

祭の開催や勉強会、会報「あしかび」の発行などを行い、白秋先生の顕彰活動を行っています。これまで白秋先生を顕彰してくれた地元の人たちは、先生に小さいころから親しみ、誇りに思い、先生の顕彰活動を行うことを生きがいと感じ、ボランティアで活動してこれました。しかし会員の高齢化が進み、白秋先生を直接知っている人がだんだん少なくなっている状況です。今後は、いかに若い人に白秋に興味を持ってもらい、顕彰事業を引き継ぐ人を増やしていくかが課題です。白秋生家の入館者の減少など、全国的に見ても白秋離れが進んでいます。柳川市においても例外ではありません。白秋を身近に知ってもらう

ために、学校などで白秋のうたにふれる機会を増やすことが必要です。また11月の白秋祭は、夜がメインになっていますが、昼のイベントも考えて、さらに白秋先生を知ってもらう工夫も必要ではないでしょうか。そういうことには、白秋会も協力していきたいと思っています。白秋の顕彰活動は、これまで先人がレールは敷いてくれているので、今後はこれまでの事業の中身を見直し、さらに濃いものにしていきたいと思っています。その取り組みの一つとして、今年から会員の勉強会を一般公開し、「白秋を語る夕べ」と題した講演会を開きました。白秋と山田耕柝について横尾文子先生に講演をしてもらったところ、好評でいつもの倍以上の人が集まり、会員も増えました。来年の1月に生誕120年を迎えますが、生誕祭と別の日に白秋先生についてのシンポジウムを行い、いろんな角度から白秋先生を語ってもらおうと計画中です。



大城 昌平 さん
矢留本町・56歳
白秋会会長



▲白秋顕彰の貴重な資料でもある、白秋会会報「あしかび」。昭和40年から発行されています



▲白秋の誕生日、1月25日に開かれる「白秋生誕祭」

献詩

世界から白秋のもとへ届く詩

白秋祭献詩

特選・文部科学大臣奨励賞

反抗期

心にはいつも嵐がひそむ

台風一過の青空と

あれ放題の庭

爽やかさと混沌と

すべてが窮屈そうに

しかし

絶妙なバランスで：

一言で片づけられたくない

さめた自分と

純な自分が

同時にいる

家族の体温は

あたたかく

心地よい

でも…

息がつまりそうに…

…つつとつしい



佐賀県東明館中学校 1年 大石 すず さん

いつそ ひとりきりなら

さぞかし のびのびと

深呼吸できるのに

こう考えた自分自身を

後ろめたく感じてしまっ

後ろめたさを感じる自分が

情けない

この情けなさ

まだまだ子どもだなと

見透かされているようで

はがゆい

過ぎ去った嵐の後の

思いもかけないまばゆさは

思いもかけない潔さ

私の中の嵐も

いつかは

通り過ぎていくのだろうか

白秋祭献詩は昭和28年から始まりました。今年は、国内をはじめドイツなどから7879篇が寄せられ、福岡県詩人会会員（20人）による厳正な審査の結果、特選16人、入賞36人、佳作100人が選ばれました。うち本市からは特選1人、二席2人、三席9人、佳作42人が選ばれました。なお、11月2日に行われる白秋祭式典で、入賞者の表彰と、献詩が行われます。特選受賞者と市内の入選者は次のとおりです（敬称略）。

特選・文部科学大臣奨励賞 大石すず（佐賀県東明館中1）

特選・県知事賞 梶谷晶也（両開小5）、筒井和詩（愛知県刈谷市立富士松中3）、小山沢（北九州市明治学園高1）

特選・県教育委員会賞 小山英里（岩手県江刺市立大田代小6）、石井久美子（福岡教育大学附属久留米中3）、後藤順（岐阜県岐阜市）

特選・北原白秋生家保存会賞 菊池夏生（岩手県江刺市立木細工小3）、山口光（福岡盲学校中1）、久保田真美（三池高1）

特選・西日本新聞社賞 角恭伍（羽太塚小5）、後藤春奈（城島中1）、木原祭（佐賀県東明館高1）

特選・RKB毎日放送賞 客出亜耶（和歌山県那賀郡打田町立田中小1）、山口友基（福岡市立吉塚中2）、斎藤彰吾（岩手県北上市）

小学生の部 二席＝原田あいら（両開6） 三席＝佐茂亮太（城内1）、田中智也（昭二1）、古賀海月（昭二2）、江口はるか（両開2）、枝光華那（蒲池1）、田中瑞穂（蒲池1）、藤木くるみ（両開1）、大淵由美（城内6） 佳作＝入江香里（矢留5）、梶島美紗希（昭二1）、金子友美（昭二1）、城戸光聖（両開2）、樽見皇征（蒲池1）、田中静哉（昭二2）、成清彰悟（柳河2）、亀真央（城内2）、梅崎麗奈（昭二2）、牛嶋小雪（柳河2）、江口南美（城内2）、荒巻雅人（昭二2）、古賀未来也（矢留2）、古賀章子（城内3）、荻島青空（同）、大淵浩史（同）、廣松真美（蒲池3）、原木ノ実（東宮永3）、井口楓弓（蒲池3）、古賀杏奈（両開3）、古賀武尊（柳河3）、山田卓弥（同）、古賀伸吾（東宮永3）、山田純也（昭一4）、伊藤沙也那（同）、成清圭哉（両開4）、近藤大貴（城内5）、荒巻祐太（昭二5）、渡辺美貴（柳河6）、江口莉加（両開6）、山田ゆい（矢留6）、倉本麻衣（両開6）、萩尾晃（柳河6）

中学校の部 佳作＝田中希誉（城南2）、相浦大輔（蒲池2）、池上奈摘（蒲池1）、待鳥奈津美（昭代1）、井口理恵（同）、吉岡真梨子（柳城1）、渋谷千尋（同）、保坂優果（柳城2）

高校・一般の部 一席＝松本良子（伝習館1） 三席＝山科可珠子（同） 佳作＝下田彩有里（同）

祝う

白秋生誕百二十年記念事業

山田洋次監督講演会



●日時 12月19日（日）、午後2時～

●会場 市民会館大ホール

●内容 講演会「柳川と映画」（午後2時～）、トークコーナー（午後3時～）、矢留小学校児童による合唱（午後3時30分～）

●入場料 無料（ただし入場整理券が必要です。整理券は、公民館や水の郷、市役所生涯学習課にあります）
問い合わせは、市生涯学習課（内線217・219）まで。

やまだ・ようじ

昭和6年（1931）9月、大阪府府中市生まれ。東京大学法学部卒業後、松竹に入社。昭和44年から映画「男はつらいよ」を手がけ、平成8年まで48本のシリーズを制作。本市沖端もロケ地になったこともある。藤沢周平原作の初の本格時代劇「たそがれ清兵衛」（平成14年）は、映画各賞を独占し、米国アカデミー賞外国作品賞にノミネートされた。父親の墓が東蒲池の崇久寺にある。

白秋かるた

県歌人会が白秋の短歌（約八千首）の中から百首を選びました。1セット1500円で、千セットを白秋生家で販売しています。
問い合わせは、白秋生家（☎73・8940）まで。

写真付き記念切手シート

切手シートの図案は、白秋のいと



白秋かるた



記念切手シート



エコーはがき

11月2日は白秋の命日 白秋祭

◆白秋祭式典

白秋祭献詩の表彰や、受賞詩の朗読、白秋の母校・矢留小学校児童による合唱や、水天宮ばやしが披露されます。詳しくは、生涯学習課（内線218）まで。

- 日時 11月2日（火） 10:00～
- 会場 白秋詩碑苑（矢留本町）

旧戸島家住宅は、2日の休館日も臨時開館します。

◆白秋祭水上パレード

11月1日から3日間、午後6時に古文書館前を出発。ドンコ舟の提灯が連なり、川岸のかがり火、仕掛け花火など、川下りコースを一大絵巻のような美しさに包みます。 来年の水上パレードの乗船受付を11月1日から行います。詳しくは、市観光協会（☎73・2145）まで。

取材を終えて

80歳を過ぎたおばあちゃんが二人、生家を訪れたそう。生まれて初めて来たということ。もう一度来られるか分からないからと、じっくり見学し、感動して帰られたそう。生家で行われている「赤い鳥」のコンサートでは、最後に必ず「帰去来」が歌われるが、初めてこの曲を聞いた人が泣いて帰られることもあるそう。そういえば、息子がまだ言葉も上手にしゃべれないころ、ラジオから「あわて床屋」が流れると楽しそうに手を動かして喜んでいたので思い出す。白秋生家の入館者数は年々減少している。しかし、白秋の魅力は衰えるどころか、輝きを増している気がする。 英